

Special Essay

「山吹の花」

医学部看護学科

中嶋カツエ

春に咲く花のなかで好きな花に山吹がある。ギザギザの葉のついたしだれ枝の先に黄金色のたくさんの花が咲く。柔らかい緑色に八重咲きの花が咲き乱れるのもよいが、一重の花の気品のある様もなんとも言えない。

この花が好きになったのには二つの理由がある。ひとつは幼い頃、母が話してくれた母の実家の庭に咲いていた花がこの山吹であった。人の借財の肩代わりに人手に渡った実家のことを母はあまり話したがらなかったが、高台に建つその家の垣根に市だれて咲く山吹の花がとても美しかったと話してくれたことがある。母の実家の山吹を見ることはなかったが、幼心に母の心とこの花が重なって残った。

もうひとつは、有名な太田道灌の話である。狩りに出た道灌がにわか雨に会い、蓑でも借りられないかと近くの農家に立ち寄ったが、一人の少女が黙って差し出したのが山吹の花であった。花の意味がわからぬ道灌は怒り、雨の中を城に戻り家臣に話したところ、後捨遺和歌集に兼明親王の「七重八重 花は咲けども山吹の(実)みのひとつだになきぞかなしき」という歌があり、その娘は蓑ひとつなき貧しさを山吹に例えたのではないかと教えられる。道灌は少女の機知に感心するとともに自分の教養の無さを恥じ、それ以後歌道に精進したという話である。

この話を本で読んだ時、道灌よりも山吹の花を差し出した少女に自分を重ね、文学への淡いあこがれといつか自分もこんな女性になりたいと幼いなりに思ったものである。山吹の花は好きな花となった。

文学とは直接縁のない分野で仕事をするようになったが、昔、夢中になった万葉集や和歌にあった季節の景色や木々の花に気をとめることがよくある。日々の暮らしはすべてが人との関わりであり、喜び、悲しみ、時に怒りもするが、物言わぬ木々や花に向かうところが穏やかになっていく。人は万葉の昔からこうして自然に語りかけ、自然もまたそうした人の思いをどれほど受け止めてきたのだろう。

看護学科の中庭の真ん中に一本の花水木がある。初代学科長であった山下文雄先生が看護学科の「いのちの木」としてシンボルツリーにされたと聞いている。季節が変わる毎にその色を変えながら、十五年余が過ぎた。開設時の様々な困難や期待を超えて看護学科の歴史を見つめてきた木である。この木をことさらいとおしく思うこの頃である。

